



教師を目指す学生による「学生文化」「学校文化」の創造と
新たな「学生と学校のWin-Winの関係」の構築

東浦町SP通信

～東浦町では、学生ボランティアを“職員の仲間”という思いを込めて、
「SP」または「スクールパートナー」と呼んでいます。～

第 26 号

2025 年 1 月 24 日

編集 緒方 なな
東浦町教育委員会
SPコーディネーター

シニアSPからのメッセージ

今年度の「冬休みわくわく算数教室」には、7人のシニアSP（SPの卒業生で、現役教員）が連日かわるがわるお手伝いに駆けつけてくれました。やはり、現場の先生は一味も二味も違います。指導の駆け引き、教え方の工夫も引き出しが多く、何より子どもとの距離感や関係づくりが素晴らしいです。こうして駆けつけてくれるシニアSPには毎度感謝の気持ちでいっぱいです。シニアSPにとっても、仲間や先輩に会えたり、初心を思い出せたりする場所になっていたら幸いです。

今回、3人のシニアSPからメッセージを預かりましたので、ぜひご覧ください！

私は、中・高の理科免許を取って、現在は中学校で働いています。小学生に算数を教えることとは離れているように感じるかもしれませんが、目の前の子どもに向き合い、その子に合わせた手立てを考えて声をかけていくことは、すべての教育現場で行うことです。そして、ある意味センスが必要だと思います。外国籍の生徒の取り出し授業は、特に「わく算に似ているなあ」と感じています。自分なりに考えた方法を学生のうちにたくさん試せたことが、大きな財産になりました。

また、教育現場については、暗いニュースが流れたり、世間から“大変だ”というイメージが強かったりします。確かに大変なことは多いですが、どの職業にも大変なことはあるはず。だからこそ、「自分」がどう思うかが大切です。やりがいがあり、季節を実感しながら働けて、未来ある子どもたちから逆に教わることも多く、パワーをもらえる職業だと私は思います。教師を目指す人もそうでない日も、ここで経験できたことを活かして活躍なさってください！ 【中学校勤務 7年目】

SPでの経験は、1年目の僕にとっても役立っています。教科書で学ぶ学校の実態ではなく、リアルな現場を知った状態でスタートできたという点が大きい。そして、わく算での1対1、1対2での指導は、全体指導の場でも基礎となります。全員に対して同じ指導をするのではなく、それぞれがどこにつまずいているのかを見極め、個々に応じた指導をするという点では1対1の個別学習でも30人学級の授業でも一緒です。教育の原点は、1対1の指導だと現場に出てから感じています。

SP活動は、大学の座学の授業では学ぶことのできない貴重な体験ができる場です。失敗を恐れずにいろいろなことにチャレンジしてみましょう！ 【小学校勤務 1年目】



あるシニア S P (小学校勤務 6 年、中学校勤務 3 年目) は、通信を書いてくれました。わく算では例年、何名かの S P さんの代表の方に司会をしてもらっています。集団指導できる貴重な場です。(学年がバラバラで、広い場所で指導する機会はここ以外ではそうそうないでしょう。) わく算での司会について書いてくれた内容でしたので、一部抜粋して掲載します。

集団指導は、個別で話をするのとは違った難しさがあります。特に、低学年相手となると、聞かせるのにはテクニックが必要です。皆さんは学生ですからテクニックを知らなくて当然です。これから勉強していけば OK ! あの状況で投げ出さずに司会をやり切った S P さんはとても立派だと思います。

S P さんが前で話している間に、ずっと大きな声で話している児童に苦戦していました。強い指導をすれば黙って聞かせることも座らせることも簡単です。でも、S P さんは「静かにしなさい！」とは言わず、何とかにこやかに話を聞かせようとしていました。簡単に大きい声で制圧するようなことをしなかったこの S P さんは素晴らしい！とはいえ、この状況を放置することは周囲の子どもたちにとっても良くないです。現場であれを放置すれば、その集団は「話を聞かなくてもいいのだ」という価値観に育ってしまいます。

では、みなさんならどう指導しますか？ 有名なのは、『待つ』です。『待つ』というのは大切なテクニックの 1 つです。相手が話を聞かない 1 つの要因に、「聞き手を無視して話し続ける」というのがあります。相手が話を聞く姿勢になるまで待つことで、集団に“聞く雰囲気”をつくらせることができます。そしてすかさず、『価値づける』のです。「聞く姿勢になってくれてありがとう。では、話します。」そうすることで、強い指導をしなくても集団は話を聞くようになってきます。

とはいえ、それでも低学年は難しいです。明らかに周囲に迷惑をかけている場合は、『短く』『毅然と』指導するのも 1 つのテクニックです。相手と目を合わせて「それはダメ」というメッセージを伝えます。ここの線引きができるかできないかで、子どもとの距離感が大きく変わります。『短く』『毅然と』指導したあとは、「良い姿勢で聞けるね！」「ありがとう！」「もう少しだけ話をさせてね。」などのフォローもすると良いです。もちろん、細かく小言ばかり言っている教師では子どもとの信頼関係は築けませんから、注意してください。

「算数の学習に向かう」ことに重きを置けば、「静かに話を聞く」ことの優先順位は低いです。何を大切にするかを見失ってはいけません。ただ、「安全・安心な学びの場」という条件が崩れるようなことがあれば、毅然と対応する必要はあると思います。

学生のうちに集団指導を経験できる回数は非常に少ないです。ましてや、リアルな子どもの姿に対して指導することは、普通はありません。教育実習で相手する子どもたちは仮の姿ですから……。わく算で経験したことを、ぜひ S P さん同士で話してください。どんなチャレンジもすべてが学びに繋がります。仲間と共有することがみんなで考えるきっかけにもなります。まさに、“協働的な学び”です。学生の間にしかできない貴重な学びです。